
生命詩歌

大泉月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生命詩歌

【Zマーク】

Z0572Y

【作者名】

大泉月詠

【あらすじ】

不思議な場所で過去の自分とお話しする物語です

周期的な振動が私の意識をまどろませる電車内。腰掛けた赤布張りの椅子は堅くて、お世辞にも座り心地がいいとは言えない。けれども、窓から差し込む太陽光が僕の膝に陽だまりとなつていて、眠りの世界へと誘われてしまうのだ。

「あたしのお話、聞いてくれる?」

柔らかく澄んだ声が耳に届いた。

「ああ、いいよ。子守唄くらいにはなるだろ?」「

言ってから思う。ああ、私はなんて失礼なことを言つているのだろう。しかし思考と行動は伴わない。そもそも、意識はなかつたのかかもしれない。

「眠たいの。まあいいわ、愚痴のようなものだから」

目の前の席に座つた三つ編みの少女はそう言つて、不思議な話を始めたのだ。

それは、まるでもう少ししたら私の瞼が見るであろう夢の話。ぼやけた少女の柔らかな輪郭の中で、サクランボの柔らかさを湛えた、言葉を滔々と紡ぐ唇だけがはつきりと瞳に映る。

あたしには夢があつたの。

お父さんみたいになりたかったの。いつも働いてくれて、けれども帰つてきたら優しくあたしに「ただいま」と言つてくれる、そんな人にな。

私は覚えている。遠い昔の記憶と同じだ。

「わかるよ、でも……その後はきっと」

言葉は伝わつただろうか、夢と現の境界に飲み込まれてしまつたのだろうか。

少女の顔に一度強い日差しが当たり全くの白い世界となる。

そして少女は失われて、私は再びといつまでもなく、眠りに体を寄せる。しかし、寄せたのは眠りの暖かさではなく、冷たさであった。

氷のように冷たい、しかし柔らかさを持ったそれは私のよく知る女の体。わずかにお驚いて、私の右肩を支える彼女の顔を重い瞼の向こうににある瞳に受け入れるのだ。

髪を肩のところで切りそろえた、鋭い目つきの女の子。

「久しぶり、私のことを知っているよね」

「さあ、わからない。でも、あなたの言いたいことはわかっているわ。当てる見せるわよ」

彼女は悲しげに微笑み、「変わつてないんだね」と呟いた。

「ええ、私は変わらなかつた。むしろ変われなかつたの」

少女は独り言を始める。それは、漏れ出す吐息のよう。

私は十四になつてから、好きな人ができたの。かつてよくてね、それでいて頭がよくて。非の打ちどころのないところに惚れたんだと思ひ。

ある日私は告白した。すんなりと受け入れてもらえたわ。その時ばかりは、嬉しかつた。

でも、それからすぐになんて彼のこと好きになつたのかわからなくなつて、別れたわ。

同時に自分の存在とか夢とかがわからなくなつちやつた。言葉を多く語らなくなつて言つた。

そして、お父さんは亡くなつたの。

「この先は、知らない。教えてくれない？」

少女は私に問うた。

ええ、いいわよ。この後、後悔するの。お父さんは、私に「おかえりなさい」を言つて欲しくて働いていたのに、私は自分のことば

かりに気を取られていた。このこともお母さんに言わなければ一生気がつけなかつたかもしれないわね。

そうして、後悔したの。気がついたら、周りが信じられないくらいに変わつて見えて、ものすごく恐ろしかつた。
私だけがとても小さく見えた。

「まだこの先はあるけど、聞きたい」

「どうせ、苦しみから逃れようとして飛び降りるんでしょう。それくらい知つてるわ」

少女はそつけなく応えた。きっとそれは彼女が予想できた答えだ。いろんなことがあつて、「こちや混ぜになつた彼女の。

電車はトンネルに入った。近くにいる髪の短い彼女の顔は見えないけれど、光に取り込まれていたはずの三つ編みの少女が再び姿を見せた。

「見てみようよ、あなたが見た困惑の世界を…」

そう言って、窓を勢い開ける。同時にトンネルを抜けた。

一面の花、広がる青空。山に木々は芽吹き、風が電車内に吹き込む。

「そうよ。私はあなたの思った通り、この世界が恥ずかしくて逃げたの。でも、それは扉を開ける前に別のものに変わつてしまつた」「いつたいどんなものに？」

髪の短い少女は眉間にしわを寄せて言った。彼女の髪は風にそよぎ、風という不定形なものの存在を伝えている。

「まず、外へ出てみようか」

木枠の窓を支える三つ編みの少女が私と彼女の両方に手を差し出した。そして、思いつきり花畠に投げた。

眠気などどこかに吹つ飛んでしまつた。心なしか困惑顔の彼女も嬉しそうに見える。三つ編みの少女は電車の中から笑つてこちらを見ていた。

「答えを言つよ」

私と電車にいる彼女は息を合わせてこう言った。

『もう一回やり直したいの。例え、つらくても、私は知っているから』

それが正しいのかもわからない。でも、それは私の答えなのだ。

昔から閉まといっぱなしで、たつた今開いた願い。

時間はきっと戻らない。電車は過ぎていくし、この答えを取り消すこともできない。

でも、ただ笑つていていい。

(後書き)

部活動で短編を書くことになっていたのですが、あまりにも電波話すぎたのでこちらに投稿
深い意味とかないです 雰囲気とかを楽しんでいただけたら幸いで
す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0572y/>

生命詩歌

2011年10月30日16時07分発行